

Bulletion of Kagoshima  
Prefectural Archaeological Center

# From JOMON NO MORI

No. 11 CONTENTS

Case study of dating of Jomon period in Kagoshima prefecture  
-Focusing on carbide adhered to pottery-  
Michifumi Tategami・Kenichi Kobayashi

Early Pottery Technology and Variability from Kagoshima, Japan  
(No.3):The Incipient Jomon Pottery from the Nakao and  
Mukaigakoi jo-Ato Sites  
Fumie Iizuka, Masami Izuho, Pamela Vandiver, and Mark Aldenderfer

Investigation of Plant Seed Impressions from Initial Jomon  
Pottery at Uenohara Site  
Aya Manabe

Size of deep bowl type of pottery  
-Case of the pre-early stage of Jomon period in Tenjindan site-  
Keiko Otsubo

A basic study on Posted Buildings without Post Footings of Yayoi  
period in Kagoshima  
Tatsumi Yubasaki

Unearthed bell of kofun period in Kagoshima prefecture  
Shinichiro Fujishima

One aspect about bricks from the end of the Tokugawa period to  
the beginning of the Meiji Priod  
-Examination of bricks excavated from Kuji Hakutou factory site-  
Takashi Tenokuchi

Compressive strength test and fluorescent X-ray analysis of  
bricks produced from Kuji hakutou production site  
University of Tsukuba Toshiya Matsui, Risako Fukami

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 29th  
year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center

March 2019

研究紀要・年報

# 縄文の森から

From JOMON NO MORI

第11号

鹿児島県における縄文時代草創期～早期の年代測定事例  
-土器付着炭化物を中心に-  
立神 倫史・小林 謙一

縄文時代草創期に位置づけられる土器技術と変異性の基礎的研究  
(3):鹿児島県南さつま市金峰町中尾遺跡及び日置市東市来町向楯城跡の事例  
飯塚 文枝, 出穂 雅実, パメラ・バンディパー, マーク・アルデンダーファー

上野原遺跡出土縄文早期土器の圧痕調査  
真邊 彩

天神段遺跡における深鉢形土器のサイズについて  
-縄文時代早期出土遺物を対象に-  
大坪 啓子

鹿児島県における弥生時代の掘立柱建物跡の基礎的研究  
-県本土の掘立柱建物跡の集成と考察-  
湯場崎 辰巳

鹿児島県における古墳時代出土鈴  
藤島 伸一郎

幕末から明治初期における煉瓦についての一様相  
-久慈白糖工場跡出土の煉瓦の検討-  
樋之口 隆志

久慈白糖製造工場跡出土レンガの圧縮強度試験と蛍光X線分析  
筑波大学 松井 敏也, 深見 梨沙子

平成29年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2019.03

研究紀要・年報

縄文の森から

第11号

二〇一九

鹿児島県立埋蔵文化財センター

# 『縄文の森から』第11号 目次

---

---

鹿児島県における縄文時代草創期～早期の年代測定事例 —土器付着炭化物を中心に—	立神 倫史・小林 謙一	・・・ 1
縄文時代草創期に位置づけられる土器技術と変異性の基礎的研究 (3) :鹿児島県南さつま市金峰町中尾遺跡および日置市東市来町向榕城跡の事例 飯塚 文枝, 出穂 雅実, パメラ・バンディーバー, マーク・アルデンダーファー		・・・ 33
上野原遺跡出土縄文早期土器の圧痕調査	眞邊 彩	・・・ 53
天神段遺跡における深鉢形土器のサイズについて —縄文時代早期出土遺物を対象に—	大坪 啓子	・・・ 59
鹿児島県における弥生時代の掘立柱建物跡の基礎的研究 —県本土の掘立柱建物跡の集成と考察—	湯場崎 辰巳	・・・ 67
鹿児島県における古墳時代出土鈴	藤島 伸一郎	・・・ 77
幕末から明治初期における煉瓦についての一様相 —久慈白糖工場跡出土の煉瓦の検討—	樋之口 隆志	・・・ 87
久慈白糖製造工場跡出土レンガの圧縮強度試験と蛍光X線分析 筑波大学 松井 敏也, 深見 梨沙子		・・・ 95
平成29年度年報		・・・ 101

---

---



# 天神段遺跡における深鉢形土器のサイズについて — 縄文時代早期出土遺物を対象に —

大坪 啓子

Size of deep bowl type of pottery

-Case of the pre-early stage of Jomon period in Tenjindan site-

Otsubo Keiko

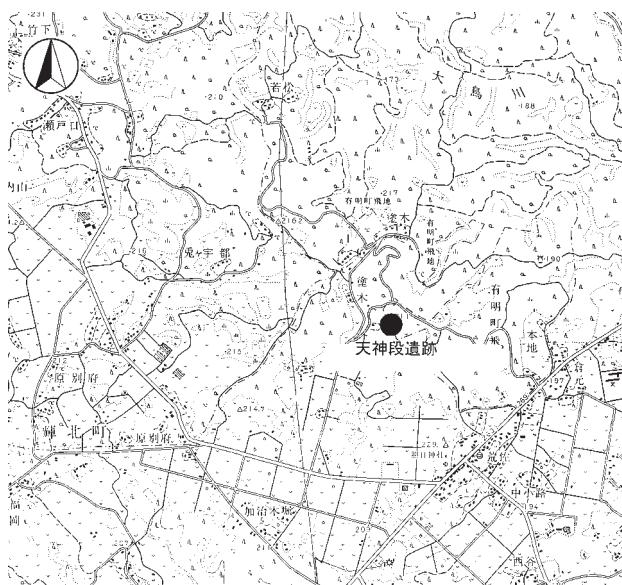
## 要旨

本稿では、天神段遺跡から出土した縄文時代早期の深鉢形土器のサイズ（法量）にバリエーションがあることに着目し、計測を行った。数値化することにより、各型式の深鉢形土器の使用用途やサイズ（法量）の規格性を検討することで、当時の生活の一端を概観することができた。

キーワード 縄文時代早期土器、深鉢形土器、サイズ（法量）、容量、規格性

## 1 はじめに

鹿児島県曾於郡大崎町野方（一部、志布志市有明町）に位置する天神段遺跡の縄文時代早期編が、2018年3月に刊行となった（（公財）埋調セ 2018）。



第1図 天神段遺跡位置図（25,000分の1）

天神段遺跡では、縄文時代早期初頭～末にかけての深鉢形土器が大量に出土した（表1）。さらに、サイズについては大小様々なサイズの土器が見られた。そこで、型式ごとのサイズの法量（口径・底径・器高）と容量を計測し、比較検討を行うことによってどのような傾向（規格性）があるか、当時の生活の在り方を検討することとしたい。

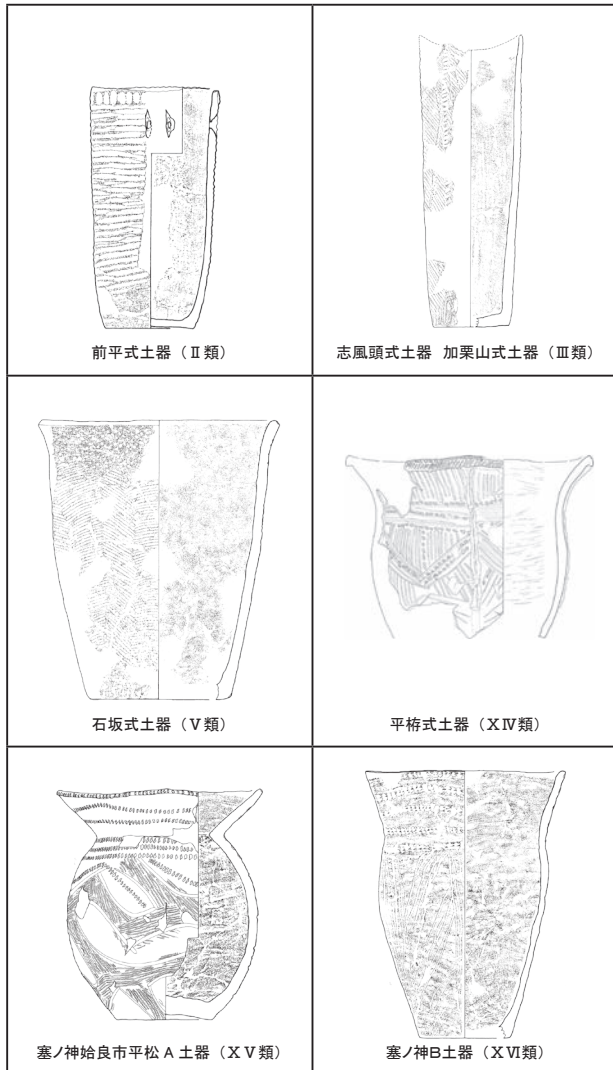
表1 天神段遺跡 土器型式分類と出土点数

類	型式	掲載点数	出土総数
I類	水迫式土器 岩本式土器 前平式土器（古）	22	47
II類	前平式土器（新）	226	824
III類	加栗山式土器 志風頭式土器	113	532
IV類	吉田式土器	28	63
V類	石坂式土器	401	1,249
VI類	下剥釜式土器	303	3,648
VII類	辻タイプ	189	659
VIII類	桑ノ丸式土器	118	481
IX類	中原式土器	71	199
X類	厚手無文土器	119	607
X I類	押型文土器 縄文施文土器（五十市式土器） 捺糸文土器 短枝回転施文土器	550	3,004
X II類	手向山式土器	253	670
X III類	妙見・天道ヶ尾式土器	65	307
X IV類	平楯式土器	860	4,147
X V類	塞ノ神A式土器	1,140	2,995
X VI類	塞ノ神B式土器	1,249	3,943
X VII類	苫浜式土器	207	522
X VIII類	轟A式土器	239	510
X IX類	無文土器	202	5,546
X X類	型式不明土器	199	5,342
合	計	6,554	35,295

『天神段遺跡3』から転載

## 2 対象とする土器型式

土器の出土量または規格性の観点から、対象とする型式を、前平式土器、志風頭式土器・加栗山式土器1)、石坂式土器2)、平楯式土器3)、塞ノ神A式土器、塞ノ神B式土器の6型式（第2図）に絞って考察する。型式は、すべて報告書『天神段遺跡3』の総括に従った。



第2図 土器分類図 (縮尺不同)

### 3 研究史

縄文土器の容量を取り上げた研究は、まず藤村東男氏の研究が挙げられる(藤村 1981)。藤村氏は、全く欠けたところのない完全土器に、直接粟粒を口縁まで入れる計測方法に加え、直接水を注ぎ込まずに破損資料を計測する方法を示した。その結果、縄文時代晩期後半土器を4つの容量グループ群に分け、さらに同一グループ群でも文様装飾や炭化物付着位置から使い分けが行われている可能性に言及している。

都出比呂志氏は、弥生時代後期の土器である畿内第五様式の小形化について論じる際に、「容量測定などは、二次的加熱の有無の観察、遺構における出土状態の考察とともに土器の機能を考えるための基礎的作業となりうるものである」とし、土器を小形～特大形の4パターンに分け、器種ごとに使い分けを考察している。

土器のサイズ(法量)については、池谷信之氏が「身体尺」に着目し、17 cm前後の単位長「尺」が「てのひら」

の長さを基準にしていた可能性が高いとしている(池谷 2000)。また、黒岩隆氏は縄文土器の大きさについて、「サイズ」に相当する「法量」という概念がいつのころから使われている」とし(黒岩 2008)、千曲川流域における縄文時代中期後葉土器の具体的な事例研究から、土器が「手のひら」の「長さ基準」に基づいていることに触れ、縄文土器の製作がある規格性に基づいて行われていた可能性が高いとした。

深鉢形土器の大形化について金箱文夫氏は、トチの実の加工場と推定される水場施設から出土した大形の深鉢形土器を「煮炊き用土器によって大量の一次加工が成された」とした(金箱 1983)。村石真澄氏は、加曾利E式土器が終末期における大形化傾向を、気候の寒冷化に伴い、食料資源が減少したため調理加工技術が進歩したことによると指摘している(村石 1985)。

次に、土器のサイズ(法量)や容量、器種分化の観点で阿部芳郎氏は、「縄文時代草創期から早期では、そのほとんどが煮沸用具として使用されている。それとともに、かたちの画一化が認められる。おおきさはバラエティーがみられるものの、その特徴は前半期の土器群に一貫して認められる」とし、多様なサイズの深鉢形土器を使用していたことを指摘している(阿部 1996)。

土器の文様形態や環境変動などと合わせ土器のサイズ(法量)や容量を考察することで、より具体的な集落の社会情勢やサイズごとの使い分けなどが検討されている。

縄文時代の深鉢形土器の容量の先行研究は、東日本で多くなされている。おおむね器種分化は縄文時代前期から広がりを見せる(阿部 1996)とし、佐藤由紀男氏は、「土器の用途や機能はその形と容量によって規定される部分が多い。煤や炭化物の付着から煮炊き用土器として推定される甕・深鉢形土器の容量の違いは、煮炊きの目的や内容物の違いを反映している可能性が高い」としている(佐藤 1999)など、主に縄文時代前期から弥生時代移行期の環境変動や食料加工技術の変化などを勘案した研究がなされている。

器種分化により使用用途の変化や食料加工技術の進歩との関連は明らかであり、使い分けなど縄文時代前期以降を対象とした研究は一定の蓄積があるが、器種分化以前の縄文時代早期の先行研究は少ない現状がある。

鹿児島県下において、縄文土器の容量について検討した事例は少ないが、曾於市定塚遺跡の発掘調査報告書の中では、完形に復元された前平式土器・吉田式土器・石坂式土器の口径・底径の計測結果から土器のサイズには何らかの規格性があるのではないかと推測している(泉埋 2010)。

容量の計測方法は渡部裕司氏が、山形盆地の甕形土器について、煮炊きや液体の貯蔵に使用されたと推定され

る甕形土器は「大きさは最も重要で様々な影響を与える要素といえる」（渡部 2010）とし、甕形土器の用途を知る一端として、容量の測定方法を詳細に提示しており、今回の計測はこれに従って行った。

#### 4 比較検討の対象とする資料

比較検討する遺跡は表 2 に示したとおり、いずれも鹿児島県内の遺跡で調査規模が大きく、遺物の出土量が豊富な遺跡を対象とした。

表 2 各型式ごとの比較対象遺跡一覧表

土器型式	比較対象遺跡	所在地
前平式土器	定塚遺跡	曾於市大隅町
	建昌城跡	始良市西餅田
志風頭式土器	前原遺跡	鹿児島市福山町
加栗山式土器	建昌城跡	
石坂式土器	建昌城跡	曾於郡大崎町 鹿屋市串良町
	前原遺跡	
	定塚遺跡	
	平良上 C 遺跡 田原迫ノ上遺跡	
平椀式土器	上野原遺跡第 10 地点	霧島市国分上之段ほか
塞ノ神 A 式土器	上野原遺跡第 10 地点	曾於市末吉町・財部町 霧島市福山町
	桐木耳取遺跡	
	城ヶ尾遺跡	
塞ノ神 B 式土器	上野原遺跡第 10 地点	
	桐木耳取遺跡	
	城ヶ尾遺跡	

#### 5 サイズ（法量）・容量計測の方法

サイズ（法量）の計測は、口径あるいは底径が図上復元されているものを対象とした。

容量の計測は、発掘調査報告書掲載の完形品（図上復元含む）と一部欠損しているが、全体が復元可能なものを選び出した。本来は土器に液体などを注入すると正確な容量が測れるが、現実的ではない上に完形品で出土する資料が少ない。そのため、深鉢形土器の容量を計測する方法として、発掘調査報告書に掲載されている実測図を用いて計測を行うこととした。計測方法は、深鉢形土器の内面を高さ 1 cm の円柱の集合体と考え、各円柱の体積を算出し、合計を 1 個体の深鉢形土器の容量とした。計測は口縁部まで行ったが、波状口縁は液体が溢れると推定される箇所までとした。

実測図からの計測方法は、実際の容量との間に誤差が生じるであろうことは否めないが、本稿では同一の方法で計測しており、比較・検討するには充分であると考え。

（計算式）

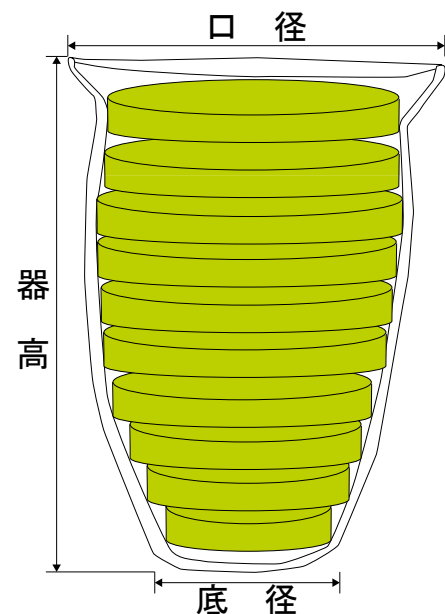
$$V（体積）= \pi r^2（半径）h（高さ）$$

（ $\pi = 3.1415926$ ）

また、角筒土器は高さ 1 cm の角柱の集合体と考え、以下の方法で計測した。

（計算式）

$$V（体積）= 縦 \times 横 \times h（高さ）$$



第 3 図 深鉢形土器 円柱体の集合体 模式図

#### 6 比較・検討

実際に計測した結果を基に、各型式の様相を、天神段遺跡を中心にサイズ（法量）や容量から検討していく。

まず、縄文時代早期前葉の前平式土器は、底部から口縁まで直線的に立ち上がる円筒形である。口径は 9.0 cm ～ 17.0 cm（表 3 ①）、底径は 7.0 cm ～ 17.0 cm にまとまりがある（表 3 ②）。出土量が豊富な定塚遺跡と比較して、天神段遺跡のサイズ（法量）が若干小さいが、まとまりは類似している。容量は天神段遺跡の出土品に関しては、1 0 ～ 3 0 の間とまとまるが、定塚遺跡の容量は 1 0 ～ 7 0, 11 0 ～ 13 0, 23 0 と小形・中形・大形に分かれる（第 5 図①）。また、器高が同一でも容量に差がみられるものもある。



写真1 天神段遺跡早期土器群（『天神段遺跡3』から転載）

口径に9.0 cm～29.0 cmと20.0 cmの幅があり、容量に変化が認められる。

次に、志風頭式土器・加栗山式土器は、底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形と、口縁部がわずかに外反し、円筒形を呈する器形がある。また、口縁部が波状を呈し、やや丸みを帯びた角部を形成する角筒形がある。また、レモン形の器形もある。口径は7.0 cm～19.0 cmにまとまり（表3③）、底径は7.0 cm～13.0 cmの幅におさまる（表3④）。天神段遺跡で出土した角筒土器は器高38.0 cmと他遺跡と比較して突出していたが、完形（復元を含む）の土器は1点と資料としては乏しい。他遺跡の出土例と合わせて検討を行うと、容量は1ℓ～3ℓ、4ℓ～5ℓ、7ℓに細分化できる。しかし、口径と底径の数値が小さいため、器高が高くなっても、容量への影響はさほどみられない（第5図②）。

縄文時代早期中葉の石坂式土器には、器形は口縁部が外反するものと直交するものがあり、体部はバケツ形を呈する。一部、胴部に膨らみのあるものもある。底部は平底である。底部は7.0 cm～15.0 cmにまとまりがあるが（表3⑥）、口径は11.0 cm～37.0 cmと若干の広がりがあり（表3⑤）、底部のサイズは維持したまま口径が広がっていく傾向がみられた。天神段遺跡では、1ℓ～2ℓ、7ℓと容量の差があるが、石坂式土器の全体でみ

ると1ℓ～3ℓ、3ℓ～7ℓ、14ℓ～15ℓに分けられる（第5図③）。

縄文時代早期後葉の平椀式土器は、肥厚した口縁部が外反し、胴部は膨らみ、底部に向けてすぼまる器形を呈する。口径23.0 cm～29.0 cmをピークに、最小値7.0 cm、最大値61.0 cmとサイズの幅が広がる（表4①）。口径に幅がみられるが、底径は、他型式と変わらないサイズ（法量）である（表4②）。

次に塞ノ神A式土器は、口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部でやや膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。底部は平底であるが、一部上げ底のものもある。口径は19.0 cm～27.0 cmにまとまりがあるが、全体的にばらつきが認められる（表4③）。底径は9.0 cm～17.0 cmにまとまる（表4④）。容量は1ℓ～3ℓ、5ℓ、8ℓに分かれる（第5図④）。

次に塞ノ神B式土器は、口縁部が外反し、頸部でややくびれ、胴部は膨らみ、底部にむけてすぼまる器形を呈する。口径が、17.0 cm～43.0 cmに多くが収まっている（表4⑤）。容量は1ℓ～9ℓ、11ℓ～17ℓ、29ℓと容量の幅が広がる（第5図⑤）。器高は他型式と比較して高い傾向があるが、それとは対象的に底径は7.0 cm～13.0 cmとさらに狭まる傾向を呈す（表4⑥）。特筆すべきは、器形が左右非対称のものが他型式と比べ圧倒的に多くなる傾向があるということである。天神段遺跡だけでなく、他遺跡でも左右非対称の土器が出土していることから、形態を意識しつつも「ゆがみ」が生じていることも指摘しておきたい。

## 7 おわりに

サイズ（法量）の数値が上がるにつれ、容量が増えるのは必然であるが、器高が相似的でも、口径の差によって容量に変化が見られた。サイズ（法量）もある一定のまとまりはみられたが、多少のばらつきがどの型式にも当てはまる。さらに、口径や器高の数値が増加傾向でも、底径の変化はさほど見られなかった。底径にはある一定の規格性が感じられるが、前述した池谷氏による「身体尺」から「てのひら」の長さを基準として底径を作り上げた可能性は否定できない。

器高と容量はおおまか小形・中形・大形に分けることができた。数値は型式ごとにばらつきが見られるが、先行研究でもあるように、深鉢形土器の用途の使い分けが行われていた可能性は示唆できる。しかし、今回計測した土器の計測数はいずれも乏しく、完形品以外の資料も含めていることから、今後さらに計測資料を増やしていきたいと考えている。

特筆すべきは、どの型式にもサイズ（法量）と容量で突出した資料があるということである。これは、どの型式の土器にも当てはまる。器高は50 cm程度のものもあ

り、土器自体も相当な重量であると想定され、持ち運ぶには適さない。その背景に関しては、今後の課題とした。

今回、天神段遺跡発掘調査の報告書に基づき計測を行った。縄文時代早期前葉、中葉、後葉と容量の変化をみたいと考えたが、おおむね同じような範囲に収まることを確認できた(第5図⑥)。ただ、縄文時代早期後葉の塞ノ神B式土器は容量の変化が顕著に見られた。これについては集団規模の変化や、食料加工を集約的に行うために大形化したなどの要因が考えられるが、天神段遺跡では堅穴住居跡などの遺構検出数が僅かであるため、筆者の推測にとどまる。

天神段遺跡の縄文時代早期では、平椀式土器・塞ノ神式A式土器・塞ノ神B式土器の出土量が突出している。上野原遺跡第10地点等と比較検討することで、集落の規模や盛衰を考察する手がかりとなるだろう。

以上、限られた資料による検討ではあるが、深鉢形土器のサイズについて、ある一定の規格性をみることができた。生活に直結した煮炊き用具としての深鉢形土器の法量や容量を計測することは、施文方法や器面調整方法などの分析同様、土器研究の上で重要な意味を成すものとする。今後、さらに計測資料を増やし、より傾向や特徴を明らかにして、縄文社会における深鉢形土器のサイズが示す意味について追求していきたい。

本稿を起こすにあたり、ご教示いただきました多くの方々を末筆ながら記して、感謝の意を表します。

岩澤和徳 倉元良文 立神倫史 眞邊彩 森えりこ  
前迫亮一 東和幸 西園勝彦 上床真 徳永愛雄  
馬籠亮道 岩永勇亮 藤島伸一郎 浦博司

(敬称略)

## 【 註 】

- 『天神段遺跡3』では、志風頭式土器と加栗山式土器をⅢ類土器としているため、同じ分類として扱った。
- 石坂式土器は前迫亮一氏により石坂Ⅰ式土器と石坂Ⅱ式土器に区別される(前迫2003)が、『天神段遺跡3』ではⅤ類土器として扱っているため、本稿でも同様に扱った。
- 天神段遺跡の平椀式土器(XⅣ類)の底部は型式を断定することができず、復元が不可能であったため、今回の計測から除外した。

## 【参考文献・報告書】

藤村東男 1981「土器容量の測定」『考古学研究』第28巻第3号 考古学研究会

都出比呂志 1982「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』平凡社

村石真澄 1985「深鉢のサイズからみた社会変動—縄文時代加曾利E期の南関東西部について—」『法政史論12号』法政大学大学院日本史学会

金箱文夫 1996「埼玉県赤山陣屋跡遺跡—トチの実加工場の語る生業形態」『季刊考古学 第55号』雄山閣

阿部芳郎 1996「食物加工技術と縄文土器」『季刊考古学 第55号』雄山閣

佐藤由紀男 1999「第4章 西日本における甕・深鉢形土器の容量組成の変化—伊勢湾周辺以西の事例—」『縄文 弥生移行期の土器と石器』雄山閣

池谷信之 2000「縄文時代の単位長「尺」」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版

前迫亮一 2003「石坂式土器再考」『鹿児島県立埋蔵文化財センター 研究紀要 縄文の森から 創刊号』

黒岩隆 2008「縄文土器と尺度」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション

宮内信雄 2008「縄文土器の容量」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション

渡部裕司 2010「山形盆地における古墳時代前期土器器甕の計測—容量と形態の特徴について—」『平成21年度 年報』財団法人 山形県埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001『上野原遺跡第10地点』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『城ヶ尾遺跡Ⅱ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(60)

鹿児島県始良町教育委員会 2005『建昌城跡—平成11～15年度 発掘調査報告書』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書 第10集

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2005『桐木耳取遺跡Ⅱ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(91)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2007『前原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(107)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010『定塚遺跡・稲村遺跡』鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書(153)

(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2017a『平良上C遺跡』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(11)

(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2017b『田原迫ノ上遺跡2』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(15)

(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2018『天神段遺跡3』(公財)鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(18)



② 前平式土器 底径

(cm)	定規通跡	建昌城跡	前原通跡	天神段通跡
30.9~29.0				
28.9~27.0				
28.9~26.0				
24.9~23.0				
24.9~21.0				
23.9~19.0				
18.9~17.0				
14.9~13.0				
12.9~11.0				
10.9~9.0				
8.9~7.0				
6.9~5.0				
合計	136(内4点完形)	2(内1点完形)	1	25(内4点完形)
				総計 164点

◎ 完形

① 前平式土器 口径

(cm)	定規通跡	建昌城跡	前原通跡	天神段通跡
30.9~29.0				
28.9~27.0				
28.9~26.0				
24.9~23.0				
22.9~21.0				
20.9~19.0				
18.9~17.0				
16.9~15.0				
14.9~13.0				
12.9~11.0				
10.9~9.0				
8.9~7.0				
6.9~5.0				
合計	103(内完形4点)	2(内完形1点)	3	22(内完形4点)
				総計 149点

◎ 完形

③ 志鳳式土器・加栗山式土器 口径

(cm)	建昌城跡(志鳳頭)	建昌城跡(加栗山)	前原通跡(志鳳頭)	前原通跡(加栗山)	天神段通跡
24.9~23.0					
22.9~21.0					
20.9~19.0					
18.9~17.0					
16.9~15.0					
14.9~13.0					
12.9~11.0					
10.9~9.0					
8.9~7.0					
6.9~5.0					
合計	31(内4点完形)	53(内5点完形)	22(内3点完形)	35(内3点完形)	10(内1点完形)
					総計 152点

◎ 完形

⑤ 石坂式土器 口径

(cm)	建昌城跡	田原迫/上通跡	定規通跡	平良上C通跡	前原通跡	天神段通跡
40.9~39.0						
38.9~37.0						
36.9~35.0						
34.9~33.0						
32.9~31.0						
30.9~29.0						
28.9~27.0						
26.9~25.0						
24.9~23.0						
22.9~21.0						
20.9~19.0						
18.9~17.0						
16.9~15.0						
14.9~13.0						
12.9~11.0						
10.9~9.0						
8.9~7.0						
6.9~5.0						
4.9~3.0						
合計	16(内4点完形)	74(内5点完形)	7(内7点完形)	8(内2点完形)	1(内1点完形)	48(内4点完形)
						総計 149点

◎ 完形

④ 志鳳式土器・加栗山式土器 底径

(cm)	建昌城跡(志鳳頭)	建昌城跡(加栗山)	前原通跡(志鳳頭)	前原通跡(加栗山)	天神段通跡
14.9~13.0					
12.9~11.0					
10.9~9.0					
8.9~7.0					
6.9~5.0					
4.9~3.0					
合計	9(内4点完形)	43(内5点完形)	9(内3点完形)	22(内3点完形)	10(内1点完形)
					総計 98点

◎ 完形

⑥ 石坂式土器 底径

(cm)	建昌城跡	田原迫/上通跡	定規通跡	平良上C通跡	前原通跡	天神段通跡
28.9~27.0						
26.9~25.0						
24.9~23.0						
22.9~21.0						
20.9~19.0						
18.9~17.0						
16.9~15.0						
14.9~13.0						
12.9~11.0						
10.9~9.0						
8.9~7.0						
6.9~5.0						
4.9~3.0						
合計	5(内4点完形)	59(内5点完形)	7(内7点完形)	16(内2点完形)	1(内1点完形)	17(内1点完形)
						総計 86点

◎ 完形

表3 型式ごとの計測結果1 (口径・底径)

① 平橋式土器 口径

Table with 7 columns: (cm), 上野原遺跡第10地点, 天神段遺跡, 榎ヶ尾遺跡, 榎木耳取遺跡, 上野原遺跡第10地点, (cm). Rows include diameter ranges like 609-680, 589-570, 569-550, 549-530, 529-510, 509-480, 489-470, 469-450, 449-430, 429-410, 409-380, 389-370, 369-350, 349-330, 329-310, 309-290, 289-270, 269-250, 249-230, 229-210, 209-180, 189-170, 169-150, 149-130, 129-110, 109-80, and total counts.

◎ 完形

③ 壺ノ神A式土器 口径

Table with 7 columns: (cm), 上野原遺跡第10地点, 榎ヶ尾遺跡, 榎木耳取遺跡, 上野原遺跡第10地点, (cm). Rows include diameter ranges like 609-600, 589-570, 569-560, 549-530, 529-510, 509-480, 489-470, 469-450, 449-430, 429-410, 409-380, 389-370, 369-350, 349-330, 329-310, 309-290, 289-270, 269-250, 249-230, 229-210, 209-180, 189-170, 169-150, 149-130, 129-110, 109-80, and total counts.

◎ 完形

⑤ 壺ノ神B式土器 口径

Table with 7 columns: (cm), 上野原遺跡第10地点, 榎ヶ尾遺跡, 榎木耳取遺跡, 上野原遺跡第10地点, (cm). Rows include diameter ranges like 609-600, 589-570, 569-550, 549-530, 529-510, 509-480, 489-470, 469-450, 449-430, 429-410, 409-380, 389-370, 369-350, 349-330, 329-310, 309-290, 289-270, 269-250, 249-230, 229-210, 209-180, 189-170, 169-150, 149-130, 129-110, 109-80, and total counts.

◎ 完形

② 平橋式土器 底径

Table with 5 columns: (cm), 上野原遺跡第10地点, 天神段遺跡, 榎ヶ尾遺跡, 榎木耳取遺跡. Rows include diameter ranges like 289-270, 269-250, 249-230, 229-210, 209-190, 189-170, 169-150, 149-130, 129-110, 109-90, 89-70, and total counts.

◎ 完形

④ 壺ノ神A式土器 底径

Table with 5 columns: (cm), 上野原遺跡第10地点, 榎ヶ尾遺跡, 榎木耳取遺跡, 上野原遺跡第10地点, (cm). Rows include diameter ranges like 289-270, 269-250, 249-230, 229-210, 209-190, 189-170, 169-150, 149-130, 129-110, 109-90, 89-70, 69-50, 49-30, and total counts.

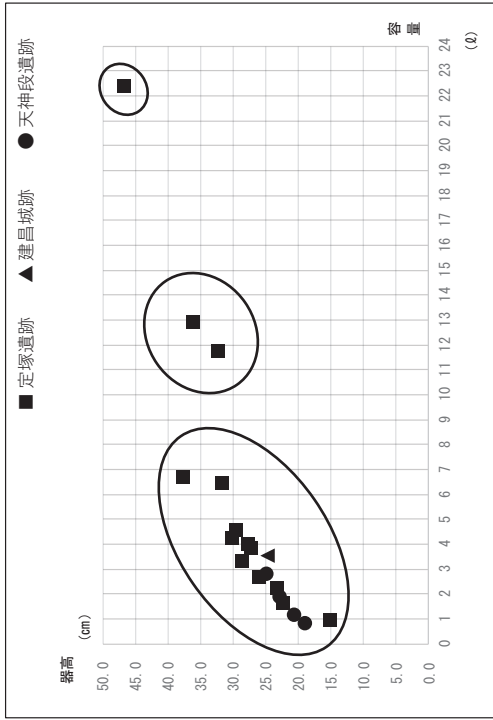
◎ 完形

⑥ 壺ノ神B式土器 底径

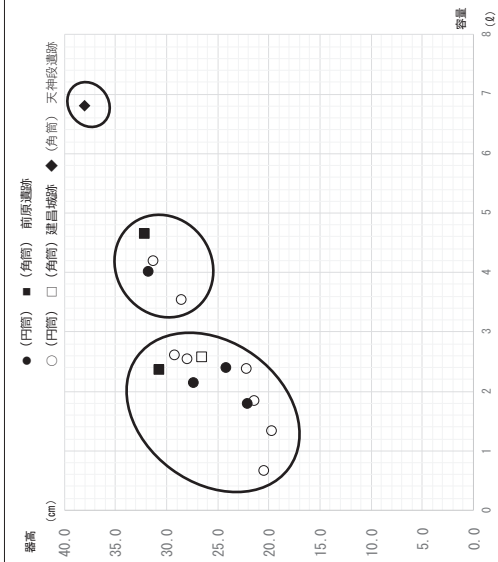
Table with 5 columns: (cm), 上野原遺跡第10地点, 榎ヶ尾遺跡, 榎木耳取遺跡, 上野原遺跡第10地点, (cm). Rows include diameter ranges like 289-270, 269-250, 249-230, 229-210, 209-190, 189-170, 169-150, 149-130, 129-110, 109-90, 89-70, 69-50, 49-30, and total counts.

◎ 完形

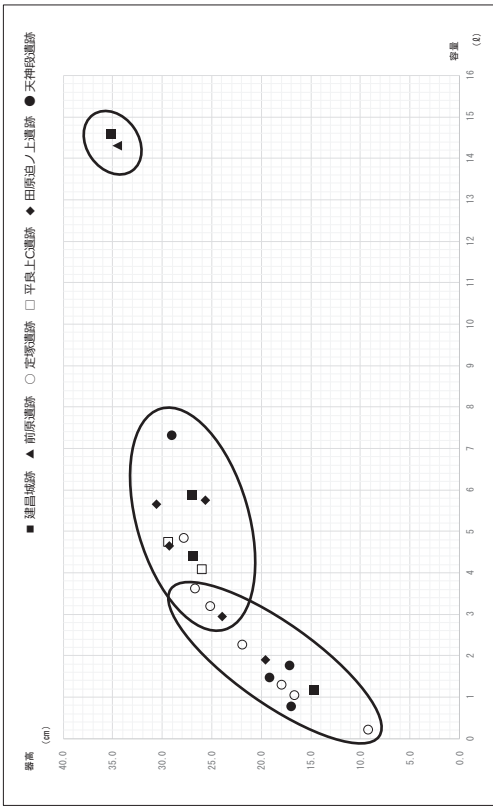
表4 型式ごとの計測結果2 (口径・底径)



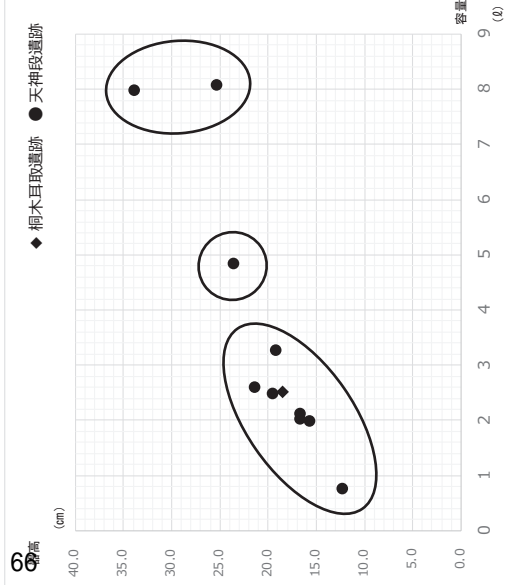
① 前平式土器の高さと容量



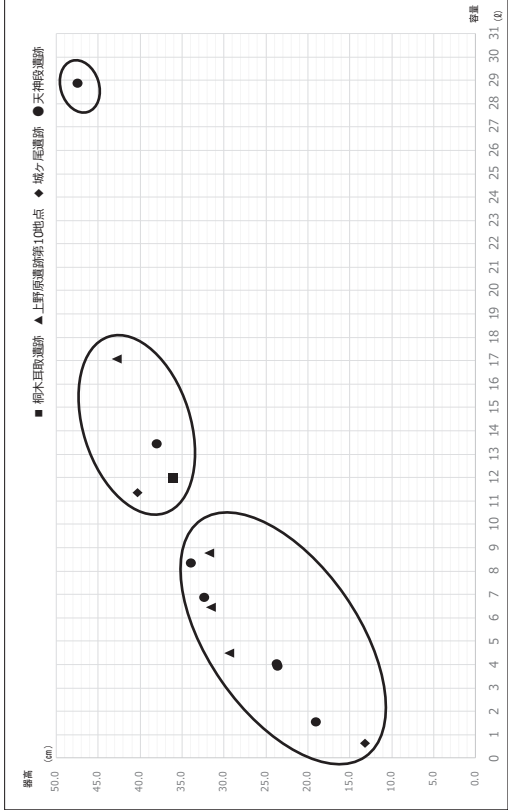
② 志風頭式土器・加栗山式土器の高さと容量



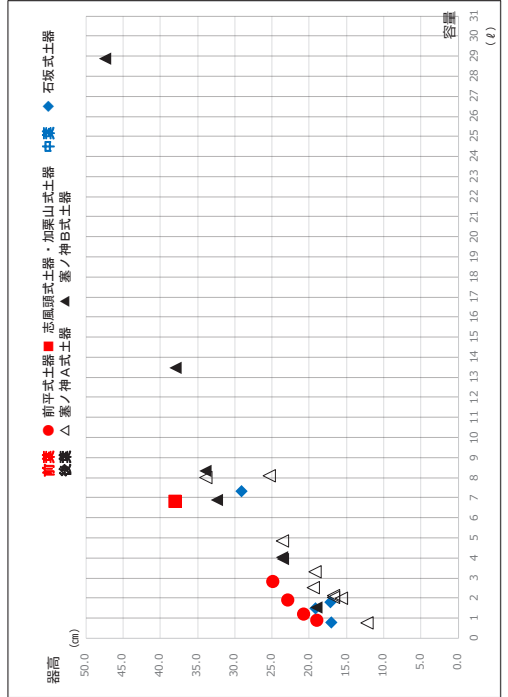
③ 石坂式土器の高さと容量



④ 塞ノ神A式土器の高さと容量



⑤ 塞ノ神B式土器の高さと容量



⑥ 天神段遺跡 縄文時代早期 深鉢形土器 容量

第4図 型式ごとの計測結果3 (器高・容量)

---

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第11号

発行年月 2019年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <http://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1

---